July 1, 2009

ISSN 1883-0595

人工物発達研究

第2巻第1号（通巻第2号）

人工物発達研究
第2巻第1号(通巻第2号)
ISSN 1883-0595
2009年7月1日刊行
編集　黒須正明

人工物発達研究

第 2 巻第 1 号（通巻第 2 号）

2009 年 7 月

総合研究大学院大学文化科学研究科

黒須正明(編)

本号の内容

人工物発達研究も通巻第二号を発刊するに至った。本誌は、総合研究大学院大学の葉山高等研究センタープロジェクト「人工物発達に関する総合的研究」に対する助成金(2007年度から2009年度)によって刊行しており、本号は2008年度に実施した研究内容をまとめている。内容は大きくわけて、前半部の書き下ろし原稿と、後半部の既刊の学会発表原稿とから構成されている。前者について、以下に簡単な説明を付与する。

0. 表紙について

読者諸氏にあらぬ期待をさせてしまったかもしれないが、本号は食をテーマとしたものではない。もちろん食生活は人間にとって重要なものであり、ハードウェア、ソフトウェア、ヒューマンウェアのすべてが関係しており、人工物発達学の観点からも興味深いものである。特に、編者は食器というハードウェアとその使い方や作法というソフトウェア、それに関係した給仕というヒューマンウェアのあり方に興味をもっており、海外出張などのたびに食卓の写真を撮影してきた(一部の写真は橋爪絢子さんの提供による)。食べるという共通の目標達成に用いられる人工物が文化によって如何に多様であるかは、人工物の多様性を示す典型的な事例であり、その意味で写真を並べたものである。将来、機会があれば、このテーマで特集を組んでみたい。

1. 黒須正明 「人工物発達学とは(2009.6時点での解説)」 P. 1

これは人工物発達学についての現時点での解説である。人工物発達学については、授業や講演でPPTを利用しているので、それに解説を加える形で文章を作成した。人工物発達学は時々刻々と体系化を進めており、これはその途中経過報告といえる。ただ、昨年度よりは体系化が進捗しているので、この時点でまとめておくことにしたものである。

2. 黒須正明 「人工物発達学(PPT)」 P. 10

これは、1で解説を行っているPPTである。なお、PPTを文書化する際に固有のページ番号が右下についてしまっており、それを消去することができなかった。それは通巻のページ番号とは別物である。

3. 澤井真代 「推移する儀礼をめぐる人工物発達学からの検討-石垣島川平の事例」 P. 33

沖縄県石垣市川平地区における地道な調査にもとづき、儀礼という人工物(ソフトウェア)の位置づけの変化について論じている。すなわち、当初は稲、麦、豆の豊作を祈念するための儀礼だったものが、耕作の対象物がサトウキビに変化した現在、儀礼は形骸化せざるを得ない面がある。しかし人々の幸せや健康を祈念するという、より一般的なレベルでは存続している。その過程で削除されたり変更されたりした儀礼項目があり、達成目標の変化によって人工物がどのように変化してきたのか、あるいは維持継続されてきたのかを知ることが出来る。本論はこのような形で、民俗学や文化人類学の研究における人工物発達学の視座を明示している。

4. マリア・ヨトヴァ 「ブルガリアのヨーグルト食文化をめぐる人工物発達学的調査」 P. 43

日本にヨーグルトという食文化が移入された源泉の一つがブルガリアだが、本論は、ヨーグルトを食するという行為の目標が何であるかをブルガリアにおける調査を通じて論じている。すなわち自家製ヨーグルトと市販ヨーグルトの選択、およびプレーンとプロバイオティクス、デザートというカテゴリー選択に関して現地調査を行い、人工物の選択的発達からその目標のあり方や変化を探るという遡行的アプローチによって、達成すべき目標と人工物の選択の関係を明らかにしている。また選択肢が多様化した背景として、技術開発によって長期保存が可能になったこと、換言すれば製造業者が間に入る形でヨーグルトという人工物が商品化された、という背景事情を明示している。

5. 高橋秀明 「本作りの現場で使用される人工物とその発達: 事例調査最終報告」 P. 54

コミュニケーションメディアには多様な人工物、すなわち道具が含まれているが、本論は、その本というメディアの制作に関与するそれぞれの立場の人々の行為の分析を行ったものである。本作りには、制作者-人工物-使用者という図式のなかの制作者サイドに関して、執筆者、編者、監修者、編集者、出版スタッフ、印刷スタッフ、流通スタッフ、営業スタッフ、マスメディアといった多様な関係者が関与している。本論は、その中で、編著者、編集者(出版社)、執筆者という三種類の関係者をとりあげ、企画、原稿作成、編

集、製本・販売というフェーズで彼らが利用しているコミュニケーションメディアについて、クリティカルインシデント法というインタビュー手法を用いて調査を行った結果を示している。

6. 橋爪絢子他 「Transition Patterns in the Use of the Cell Phone among Senior People」 P. 65

橋爪さんは筑波大学の学生で、本プロジェクトメンバーではないが、他の助成金を得て編者と共同で行った人工物発達学的な調査結果について寄稿してくれた。今後は、このような外部の方からの寄稿にも期待したい。本論は、コミュニケーションという目標を達成するためのメディアの利用に関して、固定電話から携帯通話、パソコンメールを経て、携帯メールに至る人工物選択行動の遷移パターンの分析を行ったものである。つまり、コミュニケーションという目標を達成するために利用する人工物が、どのような遷移パターンをたどり、どの点で定着するのかを、特にハイテク機器を苦手とする傾向の強い高齢者に関して調べたものである。

7. 黒須正明他 「人工物発達学における Contextual Inquiry の利用」 P. 68

人工物発達学で用いる方法には、通時代的な調査と現時点における調査とがあり、特に後者では現場主義と当事者主義を重んじる。そのため、質問紙法を利用することもあるが、多くの場合、インタビュー手法を利用することになる。人工物発達学のもととなったユーザ工学の分野では、特に Contextual Inquiry といわれる現場インタビューの手法が広く利用されている。本論は、Susan Dray という米国の著名なユーザビリティ研究者の協力を得て、その手法によってアメリカで調査を行った記録である。ここに記されたやり方がすべての国で通用するとは限らないが、英語を用いて調査を行う場合の参考として有用であろうと考えた。

以上が書き下ろし原稿であり、P.98 以降は既刊の発表論文を転載したものである。ここには以下のものが含まれている。

8. 橋爪絢子他 「The Choice of Communication Media and the Use of Mobile Phone among Senior Users and Young Users」 P. 98

9. 橋爪絢子他 「Use of Cell Phone by Senior Users Compared to Young Users」 P.107

10. 黒須正明他 「非選択と廃棄の心理 -人工物発達学にもとづくユーザ行動理論構築の試み-」 P.113

11. 黒須正明 「人工物の用途の特定性と汎用性」 P.115

12. 橋爪絢子他 「高齢者における携帯電話利用とその社会関係」 P.121

13. 黒須正明 「Usability as One of the Value Attitudes for Evaluating the Artifact - A New Perspective from the Artifact Development Analysis (ADA)-」 P.126

14. 黒須正明 「基準的価値と人工物の選択・創出」 P.132

15. 黒須正明 「ユニバーサルユーザビリティと人工物発達のあり方」 P.133

最後に、P.143 に、執筆者(第一著者のみ)紹介を掲載してある。

「人工物発達に関する総合的研究」プロジェクトでは、これまでに発表した研究以外にもまだ多くの調査研究を実施している。それらの内容と結果については、次号にまとめて掲載する予定である。

本助成金によって、人工物発達学のアプローチは、その基礎的概念や方法論を固めることができ、また適用分野の広さを確認することもできた。その意味で、本助成金に対しては深く感謝の気持ちをもっている。

また、この 3 年間で確立しつつあるアプローチを適用し、さらに特定の研究方向に深化させたいという考えも持っている。たとえば、科学的研究成果を一般の人々に提供し、理解を深めてもらうという目標を達成するための人工物の利用法といった科学と社会を結びつけるための研究などである。機会を得ることが出来れば、そうした研究にも進んでゆきたいと考えている。

最後に、助成金の承認をしてくださった皆さん、研究を実施し報告を行ってくれた諸氏、事務的なサポートをしてくださった関係者の皆さんに謝意を表したい。

2009/06/27

編者 黒須正明

執筆者紹介

黒須正明（くろす　まさあき）

1978年早稲田大学文学研究科（博士課程心理学専修）単位取得満期退学、日立製作所に入社し、中央研究所でソフトウェアシステムの研究開発に従事。1988年同社デザイン研究所に移る。1996年に静岡大学情報学部情報科学科教授として赴任し、ユーザ工学の体系化を行う。2001年文部科学省メディア教育開発センター教授として赴任。現在は、学校法人放送大学教授、および国立大学法人総合研究大学院大学学長特別補佐、教授。ユーザ工学の中でも特に長期的ユーザビリティや人工物ライフサイクルや感性を含めた満足感の構造などに興味をもち、またユーザ工学の発展的応用として人工物発達学を提唱している。学会活動として、APCHI98大会委員長、IFIPTC13委員会日本委員、JIS TC159／SC4／WG6主査、ヒューマンインタフェース学会国際担当理事、INTERACT2001大会長などを歴任。現在はNPO人間中心設計推進機構の理事長などをつとめている。著訳書に「認知的インタフェース」「ヒューマンインタフェース」「ユーザ工学入門」「ISO13407がわかる本」「ユーザビリティテスティング」「ペーパープロトタイピング」「ユーザビリティハンドブック」など。

高橋秀明（たかはし　ひであき）

1990年筑波大学大学院博士課程心理学研究科単位取得退学、日本原子力研究所特別研究員、筑波大学助手を経て、現在、メディア教育開発センター・総合研究大学院大学准教授。認知心理学、特に問題解決に関する研究に従事。編著書に「メディア心理学入門」など。日本心理学会、日本認知科学会などの会員。

澤井真代（さわい　まよ）

2002年　早稲田大学大学院文学研究科考古学・文化人類学専攻修士課程修了。出版社勤務を経て、現在総合研究大学院大学（国立歴史民俗博物館）文化科学研究科博士課程在学。文化人類学、民俗学を専攻し、言語学を学びながら、琉球諸島、とくに八重山諸島の儀礼と口承伝承について調査研究を続けている。

マリア・ヨトヴァ（ヨトヴァ　マリア）

2006年ブルガリアのソフィア技術大学院修士課程経済研究科単位取得退学。2004～2006年JICAカザンラク地域活性化プロジェクトに携わり、通訳・広報の仕事を経て、現在、総

合研究大学院大学（国立民族学博物館）博士課程文化科学研究科大学院生。ヨーグルト食文化に関する経営人類学的研究に従事。

橋爪絢子（はしづめ　あやこ）

2006年法政大学文学部卒業。早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程を経て、現在、筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程に在学中。心理学、人間科学、感性情報学を専攻し、ユーザビリティを学びながら、情報通信機器の利活用とユーザ特性の関連について、特に高齢者を対象とした調査研究に従事。

人工物発達研究　第２巻　第１号　(通巻２号)
発行所　総合研究大学院大学　文化科学研究科　メディア社会文化専攻
発行人　黒須正明
〒261-8586 千葉県千葉市美浜区若葉 2-11 放送大学 ICT 教育センター内
電話 03-3984-7703 FAX 03-3984-7703

国立大学法人
総合研究大学院大学
The Graduate University for Advanced Studies (SOKENDAI)

人工物発達研究
第2巻第1号 (通巻第2号)
ISSN 1883-0595
2009年7月1日刊行
編集　黒須正明